

割田遺跡発掘調査報告書

1995

寺泊町教育委員会

序

平成5年の春の埋蔵文化財分布調査を受けてから始まった今回の発掘調査であります。平成5年から6年にかけて2次にわたり雪をかきわけて行われた確認調査を経て、「割田遺跡発掘調査」も無事に終了することができました。

ここに、その報告書が刊行されるにあたり、関係諸氏の御尽力に深く敬意を表します。

今回調査が行われた水田地帯は、当町のまさに穀倉地帯にあたる場所であります。分布調査、確認調査、本発掘調査と進むなかで、古代先人たちが生活や生産の場としてこの地を選んだとする証も明らかになったのだと思ひます。

寺泊町には西山丘陵を始めとする丘陵地帯及び島崎川流域は、先人の築いた遺跡が数多く点在しています。鶴の和島村の八幡林遺跡において、歴史的に重要な遺物も発見されたとの報告がされており、併せてすぐ近傍の門新遺跡でも貴重な報告がなされております。

近年、社会の急速な変化によって我々の生活環境も大きく変化し、それに伴う開発事業も多く計画されております。これらはまた、先人による文化遺産の破壊の危機であることの裏返しでもあります。

本来、こうした遺跡は、我々郷土の大切な歴史的遺産とし、現状のまま保存し後世に伝えていくことが、現代に生きる私たちの責務であると考えます。しかし、開発のためやむをえず遺跡に手を加えなければならない場合は、十分な事前調査を実施し、記録保存の形をとらざるを得ない場合も生じます。

今回の調査も、は堀整備事業という、まさに日本の主食である米が、ウルグアイ・ランドの農産物分野で、国際化に対応して行くために、避けて通れない開発計画により実施した発掘調査であり、その範囲も必要最小限のものであります。

この調査により、古く數百年前の人間の生活、さらには当時の社会的環境を偲ばせるものが発見されております。ここで稻作など行うには、並々ならぬ苦労があったのではないかと往時に思いを馳せております。

まさに古代史のロマンを限りなく広げてくれる、町民にとっても夢多い価値ある調査であります。

詳細は、本報告書に譲ることといたしますが、今回の発掘調査にあたりまして、寺村光晴和洋女子大学名誉教授をはじめとして、駒見和夫同大学講師、山本仁先生、佐藤俊策先生、及び新潟県文化行政課の諸氏の御指導、また調査に御協力をいただいた方々に、改めて深甚なる謝意を表する次第であります。

平成7年3月

寺泊町教育委員会 教育長 長谷川 達栄

例　　言

- 1、本書は、県営は場整備事業計画にともなう、割田遺跡発掘調査の報告書である。
割田遺跡は、新潟県三島郡寺泊町大字五分一字割田地内に所在する。
- 2、調査にあたり、長岡農地事務所と事前の協議を実施した。
発掘調査の範囲は、道路が計画されている場所 (1350m²) と、表土が切り土となる部分 (112m²) のみである。
- 3、調査は、平成 6 年 10 月 4 日から同年 10 月 29 日までの間、寺泊町教育委員会（教育長 長谷川達栄）が実施した。
なお、調査組織は本文Ⅱ章（2）に記してある。
- 4、出土遺物の整理及び報告書の作成は、平成 6 年 12 月から平成 7 年 3 月にかけて実施した。
整理作業は駒見和夫が行い、大川裕子（和洋学園埋蔵文化財調査室）、北島実穂（和洋女子大学生）、木村園美（同）、引間和歌子（同）の協力を得た。
- 5、本書は、次のように分担執筆したものを寺村光晴の監修で、駒見和夫が編集した。

- I 駒見和夫
- II (1)・(2) 星 博 (3) 山本 仁
- III (1)・(2) 2 山本 仁 (2) 1 佐藤俊策 (3) 駒見和夫
- IV 山本 仁
- V 寺村光晴

- 6、木製品については、赤外線ビジコンカメラによる墨書き文字の確認を、和洋女子大学文化資料館に依頼した。
- 7、出土遺物は、寺泊町教育委員会が保管している。
- 8、発掘調査から本書の作成に至るまで、各方面から多大なご協力と種々のご指導を賜った。ここにご芳名を記させていただき、衷心より厚くお礼申し上げる次第である。

文化庁、新潟県教育委員会文化行政課、戸根与八郎、山本 勉、高橋 保、
小野塚徹夫、田中 靖、寺泊町農林水産課、三島北部土地改良区、
新潟大学人文学部、和洋女子大学考古学研究部、(有)菅沼組、
寺泊観光センター

(以上 順不同)

目 次

序

寺泊町教育長 長谷川 達 栄

例 言

I	遺跡の立地と環境	1
II	発掘調査の経過	4
(1)	発掘調査に至るまで	4
(2)	調査の組織	4
(3)	調査の経過	5
III	調査の概要	7
(1)	遺跡の概観と調査方法	7
(2)	遺 構	8
1)	河川跡	8
	・ 1号河川跡	8
	・ 2号河川跡	10
2)	溝 跡	11
	・ 1号溝跡	11
	・ 2号溝跡	11
	・ 3号溝跡	11
(3)	遺 物	12
1)	平安時代の土器	12
2)	陶磁器類	13
3)	その他の遺物	14
IV	ま と め	17
V	結 び	18

挿 図 目 次

第1図	周辺の地形と古代・中世遺跡の分布	2
第2図	発掘調査区域	7
第3図	1号河川跡断面	8
第4図	杭・流木群	9
第5図	2号河川跡	10
第6図	1号溝跡	11
第7図	2号溝跡	11
第8図	3号溝跡	12
第9図	平安時代の土器	12
第10図	土師質土器・須恵系陶器	13
第11図	磁器	14
第12図	木製品	15
第13図	金属製品	15
第14図	土製品	16
第15図	植物	16

図 版 目 次

図版第一	1. 発掘調査前の割田遺跡	2. 発掘区全景
図版第二	1. 1号河川跡	2. 1号河川跡
図版第三	1. 杭・流木群と1号河川跡	2. 杭群
図版第四	1. 杭群	2. 杭
	3. 鳥形木製品出土状態	4. 流木
図版第五	1. 2号溝跡	2. 3号溝跡
	3. 曲物出土状態	4. 木製品出土状態
図版第六	出土遺物(1)	土師器、須恵器、須恵系陶器、土師質土器、磁器
図版第七	出土遺物(2)	磁器、曲物、木製品、鳥形木製品、鉛弾、煙管雁首、箸、鳥形土製品
図版第八	出土遺物(3)	杭

I 遺跡の立地と環境

割田遺跡は、新潟県三島郡寺泊町大字五分一字割田に所在する。遺跡の位置は、北緯 $37^{\circ}35'44''$ 、東経 $138^{\circ}47'09''$ である。

この地は新潟県のほぼ中央部、中越地方の海岸寄りにあたる。中越地方には信濃川と日本海の間に、褶曲構造の発達した何列かの丘陵が、海岸線に平行して南南西から北北東に延びている。海岸寄りには、新第三系から前期更新統の泥土と砂岩からなる西山丘陵が走る。この丘陵は妙高南麓より北へ延びる東頸城丘陵の支丘で、柏崎平野東端から東部西山丘陵に分かれて並走する。東部西山丘陵は寺泊町大字竹森の横瀧山を北端とし、西部西山丘陵は赤彦山、角田山へと連なる。東部西山丘陵の標高は200m～300mであるのに対し、西部西山丘陵は標高150m以下の低丘陵で西麓は海岸線に迫る。西山丘陵には主尾根と直行する方向に支尾根が延び、その間に低平な支谷が樹枝状に入り込んでいる。支谷には谷戸田が見られ、谷の最深部にはいくつのか滯池が存在し、小支谷の丘陵裾に沿って現在の集落が点在する。

西山丘陵の東側には信濃川が北流し、その中・下流に広大な新潟平野が展開する。また、東部西山丘陵と西部西山丘陵の間には、西山町砂田と出雲崎町市野坪の間にある分水嶺より北流する島崎川が、細長い谷底平野を形成している。島崎川の谷底平野は出雲崎付近で幅500m以下と狭いが、下流の和島村島崎付近から幅を広げ、横瀧山の北東近くで新潟平野の南部に達する。割田遺跡は、島崎川右岸の谷底平野に立地しており、幅約1500mの平野のはば中間に位置し、標高は約11m～12mを測る。

島崎川流域には、古代から中世の遺跡が多く存在している。これらは主に、小河川によって開拓された小支谷に面する緩斜面や、沖積地に面する緩斜面およびその裾部に立地する。注目される遺跡には、東部西山丘陵北端の独立小丘陵上に存在する横瀧山廃寺跡^[1]がある。木造基壇外装の建物跡や礎石抜き取り穴などの遺構とともに、埴輪・鰐尾・軒丸瓦・軒平瓦などが出土し、北陸最古の本格的な古代初期寺院であることが確認された。また、和島村八幡林遺跡^[2]は、島崎川左岸の半島状に突出した低丘陵とその裾の低地にかけて立地する。四面庇付き建物の掘立柱建物群などの遺構と、「上大領殿門」と宛書きされた封緘木簡など100点以上の木簡や、「大領」「郡」「大家驛」などと書かれた多量の墨書き器の出土から、古志郡衙に関わる施設と推定されている。

一方、自然堤防や沖積高地に立地する遺跡も少なくない。本遺跡の南東約500mに位置する和島村門新遺跡^[3]は、島崎川支流の荒巻川が形成した自然堤防上に立地し、10世紀前半の掘立柱建物跡10棟と河川跡などが発掘された。遺跡は大溝と自然河川によって外部と隔てられており、正屋・副屋・工房・倉庫などに推定される建物が柵や溝で整然と区画されて、さらに河川の蛇行部を取り込んだ船着場が設けられている。河川交通を利用した、物資の流通拠点的性格を持つ遺跡といえよう。横瀧山北方の沖積高地にひろがる京田・諏訪田遺跡^[4]では、8世紀代に掘削された区画を意図した企画性のある溝や建物跡、井戸跡などの遺構と瓦が検出されており、官衙的様相を呈している。京田・諏訪田遺跡の北西約700mの自然堤防上に立地する太屋敷遺跡^[5]は、鎌倉時代から南北朝期にかけての屋敷地と推定されるもので、17基の井戸が検出された。

この地に、須恵器窯跡や製鉄遺跡などの生産遺跡の存在が顕著である。須恵器窯跡は出雲崎町梯子谷窯跡と同メチガ谷窯跡があり、ともに7世紀末から8世紀初頭にかけての操業である。製鉄遺跡は出雲崎町の金谷川内・合清水遺跡^[6]、同谷地製鉄跡^[7]、同じくざぶろう遺跡^[8]、寺泊町中道遺跡^[9]で発掘調査が行われてい



第1図 周辺の地形と古代・中世遺跡の分布

● 割田遺跡	● 集落跡等	■ 寺院跡	□ 宮跡	▲ 城館跡
1. 赤坂山城跡	2. 上向遺跡	3. 京田遺跡	4. 横瀬山庵寺跡	5. 太屋敷遺跡
6. 日光根道跡	7. 長峯遺跡	8. 中道炭焼窯跡	9. 年友城跡	10. 和田城跡
11. 夏戸城跡	12. 木島城跡	13. 田頭城跡	14. 小谷地削遺跡	15. 稲場遺跡
16. 門新道跡	17. 八幡林遺跡	18. 中道須恵器窯跡		

る。金谷川内・合清水遺跡では9世紀前半頃の堅形製鍊炉と推定される遺構が検出され、谷地製鉄跡やげんざぶろう遺跡、中道遺跡では、古代から中世にかけての登り窯タイプの炭焼窯跡が発掘された。

また、島崎川流域は中世城跡（山城）の分布も密である。本遺跡の北西約1300mに位置する夏戸城跡は、規模や防護施設などにおいて他よりぬきんでおり、本地域の中核的な城砦と考えられる。夏戸城は越後守護上杉氏の家臣志田氏の居城で、馬蹄形の尾根や入り込んだ谷、周囲の沼沢地などの天然の地形を要害として堅固に築かれており、支城を含めた全体規模は約600m×200mにもなる。城の東下の夏戸集落には、「館ノ上」「館ノ内」「館小路」「上町」「中町」「下町」などの地名が残っており、居館を中心に小規模な城下を形成していることが推測され、山上の要害と山麓の城下が一体化した根小屋式城郭である。夏戸城跡の周囲には田頭城跡、年友城跡、木島城跡、伊奈胡城跡が存在しており、夏戸城を中心として一群を形成していたものと考えられる。

このような遺跡群の存在する島崎川流域は、古代から中世にかけての遺跡が集中的に分布している地域である。遺跡群は、官衙跡や寺院跡、集落跡や屋敷跡および城館跡、それらを支えていた生産遺跡などからなる。これら遺跡群を結ぶ交通は、島崎川に沿って縱貫していたと推定される北陸道を中心とする陸路と、島崎川およびそれに流入する小河川による河川交通によって行われていたと考えられる。今回、割田遺跡で発掘された河川跡も、こうした水運の一役を担っていたものである可能性が強い。

註・参考文献

- 1 寺村光晴ほか「横瀬山庵寺跡」「寺泊町史 資料編1」寺泊町 1991
- 2 山本 勝ほか「八幡林遺跡」と島村教育委員会 1992
- 高橋 保ほか「八幡林遺跡」と島村教育委員会 1993
- 田中 浩ほか「八幡林遺跡」と島村教育委員会 1994
- 3 「門新遺跡（現地説明会レジュメ）」と島村教育委員会 1994
- 4 寺村光晴ほか「京田・諏訪田遺跡」「寺泊町史 資料編1」寺泊町 1991
- 5 駒見和夫『太屋敷遺跡発掘調査報告書—平成2年度の調査—』寺泊町教育委員会 1991
- 6 中村孝三郎・岡本郁栄『出雲崎町乙茂の製鉄址』出雲崎町教育委員会 1977
- 7 山本 勝「谷地製鉄跡」「新潟県埋蔵文化財だより」No.5 1989
- 8 寺村光晴・駒見和夫『げんざぶろう遺跡発掘調査報告書』出雲崎町教育委員会 1993
- 9 寺村光晴ほか『金山・長峯・中道遺跡発掘調査報告書』寺泊町教育委員会 1994
- 10 鳴海忠夫「寺泊の城跡跡」「寺泊町史 資料編1」寺泊町 1991

II 発掘調査の経過

(1) 発掘調査に至るまで

寺泊町の桐原地内は、町の穀倉地帯の一つとして長年にわたり稻作が営まれてきた。この広大で恵まれた肥沃な地域には、遺跡の存在はほとんど確認されていなかった。

平成3年頃から県営は場整備事業の計画に伴い、数回にわたり長岡農地事務所、寺泊町農林水産課、及び新潟県文化行政課と協議を行い、平成5年3月2日～5日に開発区域内の遺跡分布調査を県文化行政課と、新潟大学の学生の協力を得て実施した。

その結果、周知の遺跡である「古屋敷遺跡」の他、表面採集により17ヶ所において土師器等の遺物が発見され、遺跡の存在を確認する必要が生じてきた。

分布調査の結果に基づき、平成5年12月13日～17日の5日間と平成6年1月28日に、県文化行政課の御指導・御協力の元で、平成6年度に工事に入る3ヶ所の埋蔵文化財の確認調査を行った。

この確認調査により、No.17とされた箇所より古い河川と思われる遺構と遺物が検出され、これにより、次年度に本格的な調査が必要とされた。平成6年2月、「割田遺跡」として文化財保護法に基づく遺跡の周知化を行った。

これらの経過を踏まえ、平成6年3月～8月に長岡農地事務所と埋蔵文化財の保存について協議を重ね、道路や切り土により再調査が不可能な部分、並びに遺跡の破壊が危惧される箇所について、発掘調査が必要との結論を得た。そこで、寺村光晴と洋女子大学名譽教授に調査団長をお願いし、山本仁先生、佐藤俊策先生、駒見和夫と洋女子大学講師からなる調査団を組織し、調査に先立ち、平成6年10月3日に発掘調査会を開催した。

(2) 調査の組織

発掘調査会

会長	高橋 誠（寺泊町長）
副会長	古澤 熨（寺泊町助役）
	岡田 吉衛（寺泊町教育委員長）
顧問	近藤 敏郎（寺泊町議会議長）
	杉澤繁雄（寺泊町議会文教民生委員長）
委員（幹事）	長谷川 進栄（寺泊町教育委員会教育長）
委員	寺村光晴（発掘調査団長・和洋女子大学名譽教授）
	山本 仁（発掘調査副団長・日本考古学協会員）
	佐藤俊策（発掘調査団主任調査員・日本考古学協会員）
	駒見和夫（発掘調査団主任調査員・和洋女子大学講師）
	加納博人（寺泊町農林水産課長）
	小田二三男（三島北部土地改良区理事長）
	水戸公四郎（寺泊町文化財審議会委員）、皆川早成（同）
	渡辺保平（同）、河合正治（同）、白井一男（同）

中村萬亀雄（同）、旭 善雄（同）、大越黒幸（五分一区長）
小林照夫（木島区長）

発掘調査団

調査団長 寺村光晴（和洋女子大学名誉教授）
調査副団長 山本仁（日本考古学協会員）
主任調査員 佐藤俊策（日本考古学協会員）
同 駒見和夫（和洋女子大学講師）
調査員 駒沢悦郎（東洋大学OB）
同 大川裕子（和洋学園埋蔵文化財調査室）
調査参加者 小川勉、金子貞次郎、土田三四次、足立ミヨキ、足立重二郎、青柳百合子、足立 学、
金子十四大、山崎清、阿部昭三、矢川サキ、長谷川キミ、長谷川カツエ、阿部アキ、
白井タメ、池田三津男（地元有志）
調査協力者 長岡農地事務所、寺泊町農林水産課、三島北部土地改良区
調査団事務局 田中正明・星博（寺泊町教育委員会）

（3）調査の経過

発掘調査は、平成6年10月4日から10月29日までの実質23日間にわたって実施した。以下「発掘調査日誌」によって発掘の経過を記すことにする。

- 10月3日 午後、発掘調査関係者（発掘調査会委員、発掘調査団員、事務局）が教育委員会に集合して、発掘調査に至る経過報告と、発掘調査の方法・予定について検討する。
- 10月4日 発掘実施区内にグリッドを設定。3か所のサブトレントにより地層の確認を行う。
- 10月5日 午前中雨のため室内でグリット図作成。午後、重機によりW16～23・N1～S5グリッドの表土を除去する（表土の厚さは約30cm）。Ⅱ層上面より陶器小片2点（越前系1、土師1）出土。
- 10月6日 W12ラインまで表土除去。W20ライン付近で同一方向に並ぶ杭群を検出する。ここより陶磁器片（須恵片3、珠洲片・近世磁器片2…2層上部）出土。発掘区西縁N1ライン付近で一部深掘りのトレントを入れる。
- 10月7日 E1ラインまで表土除去。E1ラインにセクションベルトを設け掘り下げる。この地点の-59cmより土瓶器片出土。-63cmで戦後の水路工事による土管出土。遺物はほかにⅡ層上部より須恵片1、土師片2、近世染付片1出土。埋没河川の流路痕が現れる。
- 10月8日 E10ラインまで表土除去（染付片1出土）。河川跡は発掘区内E1付近より検出され始め、北西方向へ伸びる。河川跡東縁を掘り下げ、流路方向を確認する。また、E1ラインで土層確認のサブトレントを入れる。
- 10月10日 E1ラインからW5ライン付近までの河川跡を、20～30cm掘り下げる。
- 10月11日 W5ラインからW10ライン付近までの河川跡を、20～30cm掘り下げる。昨年度の確認調査報告の4Tの溝跡を発掘調査区内Ⅱ層で検出。W20・N1からW25・N5方向に伸びる。
- 10月12日 昨日検出した溝を掘り下げる。溝幅は20～40cm、深さは鍋底状で中央部では15cm、底に薄く砂の堆積あり（溝中より須恵器洞片1、溝周辺より須恵器・土師器小片各1出土）。E10ラインで河川跡

を横断するトレンチを設け、約210cm掘り下げる。遺物は土師器片1、流木片数点、河川中より木製品片数点出土。

10月13日 河川跡横断トレンチのセクション図作成。重機で河川跡上部を20~30cm全面的に掘り下げる。また、W20ラインで検出されていた杭列や流木の周辺を掘り下げる。この層からの出土品は、染付・青磁片、中世陶磁片、須恵器・土師器片の他、キセル雁首、火繩銃鉛弾各1などであった。

10月14日 E15ラインで重機により深掘トレンチを入れる。トレンチ中より曲物など木片出土。また、W20ライン付近杭密集地点、流木地点付近を掘り下げる。杭を支えたとみられる横に渡した丸太が3条並ぶ。遺物は須恵器・土師器の小片、珠洲片の他近世染付が大半、かんざしも出土。1号溝跡の平面図作成。

10月15日 2号溝河川跡のセクション図作成。一方、杭列及び流木周辺を掘り、その範囲を明らかにする。遺物は杭の間から多く出土。須恵器・土師器・珠洲などの陶器小片、染付磁器小片。W16・N0~W16・N3ラインにセクションを見るためトレンチを入れる。

10月17日 排水ポンプによる雨水排除。発掘調査地区東南端に検出された2号溝跡を掘り始める。比較的浅く最深部で35~40cm測る。

10月18日 3号溝跡の掘り下げ(底部最深部35~40cm)。3号溝跡底部より板片5点採取(1点には墨書きあり)。他の遺物は須恵器片2、土師器片1出土。E17・N0付近より南東方向に伸びる溝(2号溝跡)を掘り上げる(幅30~50cm、深さ17~30cm)。

10月19日 杭列、流木出土地点の範囲、層位確認のためさらに掘り下げる。Ⅱ層上部より須恵器片1、擦鉢1、また近くのW16・S2地点より鳥形木製品出土。

10月20日 雨天のため発掘作業中止。出土遺物の水洗いと注記を行う。

10月21日 雨天のため午前中は作業員3名により排水作業。調査員は午前・午後にかけて発掘調査実施。流木の埋没範囲、その地点付近の河川流路などの確認。また河川跡の断面図作成。

10月22日 E5・N0地点より北西方向に現れている河川跡の平面図を作成。

10月24日 流木の範囲を拡張する。須恵器片、越前系陶片の他染付片2出土。

10月25日 杭列、流木地点範囲の精査及び実測作業。E12、E10ラインより須恵器・土師器・染付などの破片各1点採集。

10月26日 杭列、流木の実測図完了。

10月27日 写真撮影。発掘区東側壁面セクション図完成。

10月28日 杭の抜き取り作業。2号河川跡のセクション図作成。夜、教育委員会で発掘結果を報告。

10月29日 杭の抜き取り作業。杭列部分のセクション図作成。図面整理。午前は作業と平行して器材の撤収。午後は室内で図面・遺物の整理。

本日を以てすべての作業を終了する。

III 調査の概要

(1) 遺跡の概観と調査方法(第2図)

本遺跡内の発掘地点は字「剣田」の水田地帯、891-896-896-2-896-3番地に当る。標高は約11.1mから11.6mを測る低地帯である。ここに新設される幅9mの道路計画区のうちの長さ150mの範囲(約1350m²)、及び西北端に接続する表土を切り土する三角形をした小区画(約150m²)の、総計約1500m²に及ぶ範囲の発掘調査である。

発掘地区内に3m間隔のグリッドを設定した。グリッドは道路計画線の方向に沿って設けたもので、区画内のはば中央地点を基点(0)として、北西方向へW1~25、南東方向へE1~25とし、またこれに直交する線としては0点を中心として南西方向にS1~5、北東方向にN1~5の線をとった。すなわち発掘地区は、E0~25、W0~25、S0~5、N0~5の範囲である。また、3×3mのグリッドの各単位は、その南西隅の交点の名称で呼ぶことにした。たとえば、W5ラインとN3ラインの交点を南西隅に持つグリッド名は、W5・N3である。

発掘は耕作土を北西端より順次南東端へ向かって重機で除去し、第Ⅱ層以下は人力によって掘り下げを行った。第Ⅱ層で検出された河川跡については、1号河川跡で2か所、2号河川跡で1か所それぞれ流路を横断するように河川底部まで掘り下げて断面を観察することにしたが、1号河川跡の掘り下げ部分の1か所は途中で崩落してしまい、断面測定には至らなかった。同じく第Ⅱ層で検出された3本の溝跡については、直ちに底部まで掘り実測した。さらに発掘地区北西端付近で検出された杭群及び埋没流木についても、発掘作業の最終段階までにおいて掘り下げを実施した。

以下、各遺構について説明する。



第2図 発掘調査区域

(2) 遺構

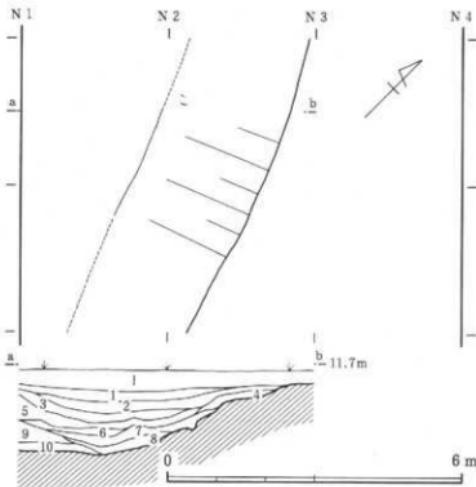
1) 河川跡

・1号河川跡（第2・3・4図・国版第二～四）

I層の耕作土下に河川跡が検出されたが、この河川は調査区のほぼ中央から大きく左へ弯曲しながら、東南から北西へ流れる。左岸は大部分が調査区外のため河川幅は明らかにできないが、W17ライン部分では16.5mを測る。第3図のとおり堆積土を見ると、灰色砂の10層には帶状の粘土層が走り多量の植物遺体を含み、暗灰色粘質土の9層も部分的に砂を含み少量の炭化物・植物遺体が検出された。暗灰色粘質土の8層はしまりが弱く帶状に砂を含み、炭化物・植物遺体が見られるところから、河川は古くは左岸側に本流があったのだが、時代と共に序々に右岸側へ移動していったかあるいは幅をせばめていたと見たい。

8層を境として9・10層が古い河川の堆積土で、1～8層が新河川の堆積土と判断される。最も深い部分は北西の調査区際でI層の耕作土下から1.3mを測り、緩いU字状を呈して左岸に至ると考えられる。W7・N3グリットの2層上部から土壌器の糸切り底部の細片を検出したが、磨耗が著しい。古い河川は10層の状況からやや平らな川底になると推測される。

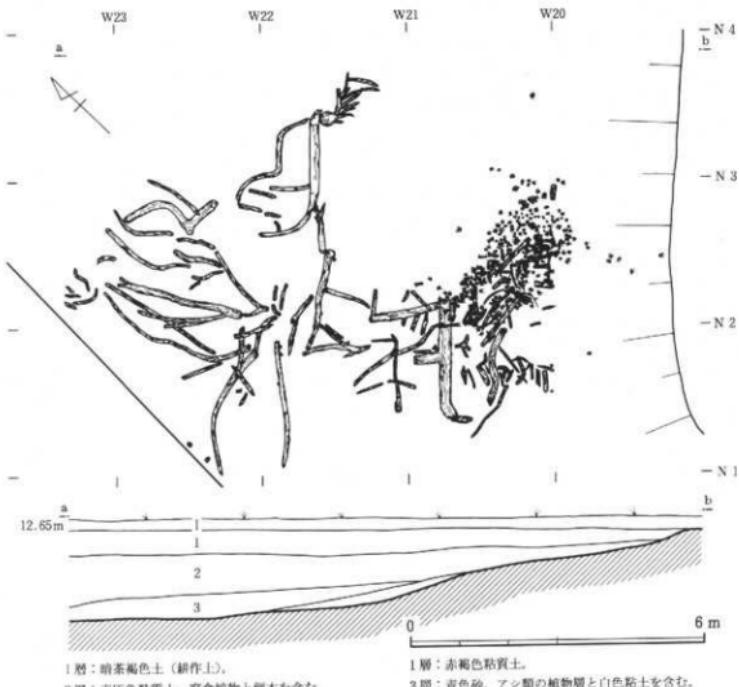
W19ライン付近では、南北4.5m、東西4mの範囲に杭が密集して打ち込まれ、さらに杭と一部が重複して北



- 1層：暗褐色土（耕作土）。
- 2層：暗褐色粘質土。粘性が強くややしまりがある。多量の鉄分と少量の白色粘土粒、植物遺体を含む。
- 3層：暗褐色粘質土。粘性が弱くややしまりがある。少量の炭化物とわずかの白色・褐色粘土粒を含む。
- 4層：暗灰色砂。しまりがややあるが、粘性は弱い。少量の鉄分を含む。
- 5層：暗褐色粘質土。粘性は弱いが、しまりはやや弱い。多量の白色・褐色粘土粒と少量の炭化物を含む。
- 6層：暗灰色粘質土。粘性強く、しまりは弱い。帶状に砂を含み、炭化物と植物遺体を少量含む。
- 7層：灰色砂。しまりとともに弱く、帶状の粘土層と多量の植物遺体を含む。
- 8層：暗灰色粘質土。しまりがあり、粘性も強い。部分的に砂を含み、少量の炭化物と植物遺体を含む。
- 9層：暗灰色粘質土。しまりがあり、粘性も強い。部分的に砂を含み、少量の炭化物と植物遺体を含む。
- 10層：灰色砂。しまりとともに弱く、帶状の粘土層と多量の植物遺体を含む。

第3図 1号河川跡断面

側の広い範囲に大小の流木が横たわっていた。流木群は北西の調査区外へ延びるようである。杭群の北西は河川幅が急激に大きく広がっており、渦状になっている。杭は総数300点を超える。W20・N2グリットを中心に密集するが、規則的な配置は見られない。径・長さともに多様で、細いものは径1.5cm～3cm、大きなもので径9cmを測るが、5cm～6cmが最も多い。また、先端部の削りも多様で、2面を削るものから3面、4面、多いもので6面を数えるが、4面の削りが一般的である。削り面の長さは5cmが最も短く、10cm～20cmが圧倒的に多い。削り具は鉈類と考えられ、削り面に段がついて數度にわたって削り取った痕跡を残すものがあった。土中に打ち込む長さも10cmの浅いものから1.6mも深く打ち込んであるものも見られた。一部は流木を打ち貫いでいる。杭の外側には曼荼の細い木



第4図 杭・流木群

が散在しており、杭に巻くしがらみに利用したものと考えられる。

杭の周辺からは土師器・須恵器・珠洲焼の磨耗した小片が検出されているが、主体は近世後半の陶磁器が占め、これに混じて煙管の雁首・かんざし・火縄銃の鉛弾なども出土している。また、板の小片もあり、杭・流木群から離れたW18・N1グリットの上層部からは鳥形の木製品が検出されている。

流木は、W21～22・N2～3グリットを中心にして大小の木が不規則に横たわっている。大きなものでは幹径26cmを測るが、8cm～10cm内外の木が一般的であり、枝をつけたものが多い。いずれも芯部まで歓らかくなっている。流木群は平面的な広がりはあまりなく、2層中に認められる。

杭の先端部は硬く光沢があるのに対し、流木は芯までもろく、杭が流木を突き刺して打ち込まれていることから、杭と流木とは時代差を有すると判断される。

この杭の密集群は、渴と推定される部分と河川との境界付近にあることから、水防のために構築したものと考えられるが、その用途は特定できない。また1層の耕作土を剥ぐと河川跡が現れ、鉛弾やかんざし・煙管などの金属具が陶磁器に混在して1層や2層上部から検出され、深く潜っていない状態から、河川は近世後半まで機能していたと判断される。

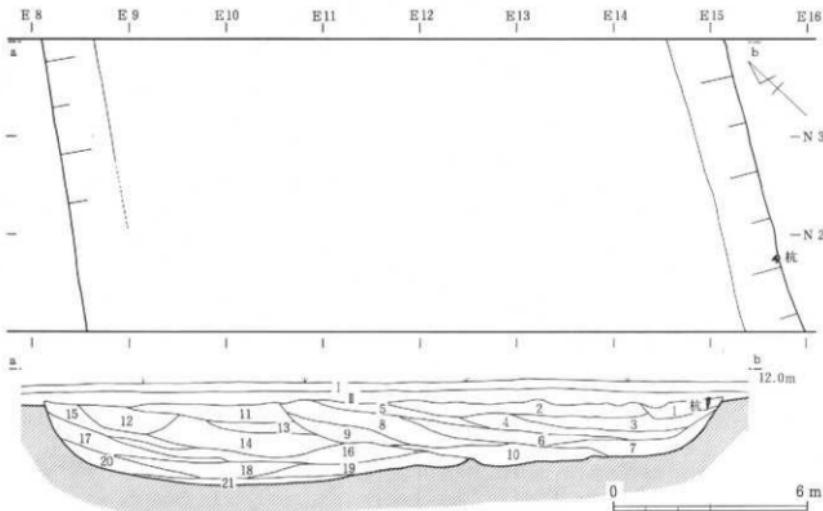
・2号河川跡

E 8～E15ラインにかけて、南北方向に流れる。I～II層を剥いた下に河道が現れ、調査区の北壁で全体幅は21.3mを測るが、1号河川跡と同様に時代とともに流路が狭まっていたと考えられ、9～10層を境に西方の左岸側が古い堆積土と判断される。深さは平均2.3mで1号河川跡より深く、鍋底状を呈する。

第5図で見るように、右岸側の1層中に約7mの間隔で径12cm、長さ41cmの杭が2本打ち込まれていた。4面を鉈類工具で削り先端を尖らせてあるが、1号河川跡の杭より風化がすんでいる。

4層は暗青灰色砂質土でしまりが強く、暗灰色の粘土と木片を含むが、この層から曲物の底板と両端が炭化した木片を検出した。また、暗褐色土で粘性が強く木片を多量に含む8層中からは、曲物の本体の一部と口縁部が検出されている。

右岸の杭の風化がすんでいることや、近世の陶磁器類が見られず、遺物が中位層の4・8層から出土することなどから、本河川跡は1号河川跡より時代が古く、特に4・8層は中世後半に機能していた層と考えられる。



1層：暗茶褐色土（水田耕作土）。 2層：明褐色土、粘性しまりとともに強い。 3層：茶褐色砂、しまり粘性ややあり、木片を多量に含む。

4層：青色砂、やや粘性があり木片をわずかに含む。砂の粒子は比較的粗く、青色の小石を若干含む。 5層：暗青灰色砂質土と木片を含む。 6層：青色砂、粘性があり、青色小石を若干含む。

7層：暗灰色粘質土、白色粘土と青色砂を若干含む。しまりがやや強く木片を若干含む。 8層：暗褐色土、粘性が強く木片を多量に含む。

9層：灰白色粘質土、白色粘土を多量に含みしまりがある。 10層：青色砂、白色粘土と植物腐食層を含む。 11層：青色砂、砂の粒子は比較的粗く、青色の小石を含む。 12層：暗褐色土、青色砂を若干含み、木片が混入している。

13層：青色砂、白色粘土を若干含む。 14層：暗青灰色砂質土、しまりが強く、暗灰色粘土と多量の木片を含む。 15層：青灰色砂質土、やや粘性があり木片を若干含む。 16層：青色砂と白色粘土の混合層、木片と腐食植物を含む。

17層：暗褐色粘質土、腐食植物を含む。 18層：青色砂と白色粘土の混合層、砂粒は比較的粗く、植物腐食層を含む。 19層：青色砂と白色粘土の混合層、砂粒は比較的粗く、植物腐食層を含む。 20層：青色砂と白色砂土の混合層、腐食植物を多量に含む。

21層：青色砂と白色砂土の混合層、腐食植物を多量に含む。

第5図 2号河川跡

2) 溝跡

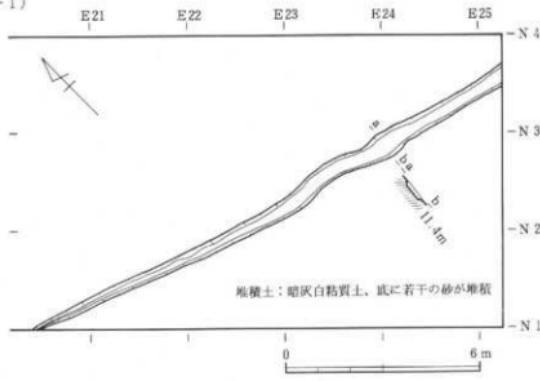
発掘地点南側地区において3本の溝遺構が発見された。それぞれ1号・2号・3号とする。

・1号溝跡（第6図）

1号溝は2層上部より検出され、E20・0グリットからE25・N5グリットの方向に向かって約14m続くが、調査区外へ延びているため全容は明らかにできない。このE25・N5グリット付近においては、前年の確認調査4Tにおいて検出されている溝跡に接続するものであるが、その部分はすでに破壊されてしまっている。溝幅はE20・0グリット付近では狭く20cmほどで、E25・N5グリットに向かって少しづつ広がり、中央部付近で30cm、末端部で40cmとなる。溝の断面形は鍋底状で、深さは平均15cmを測る。底には砂が薄くたまっていた。溝中の堆積土は暗灰白粘質土で、木炭の小片も若干混じる。溝中に須恵器の胴部片1点が埋っていた。この溝跡は2層上位から中位にかけてのものであり、近世の何らかの水路と考えられる。

・2号溝跡（第7図 図版第五-1）

2号溝跡は1号溝の北側約6mに位置し、1号溝跡と平行する。E17・0グリットからE20・N5グリット付近に向かって11mほど伸び、その先端は攪乱によって消滅している。溝幅はE17・0グリット付近で30cm、E20・N5グリット付近で50cmと広がる。深さは17cmから次第に深くなり、末端の深い所で50cmを測ることから、西方へ向かって流れていったと考えられる。この溝は2層最上部より約2cm

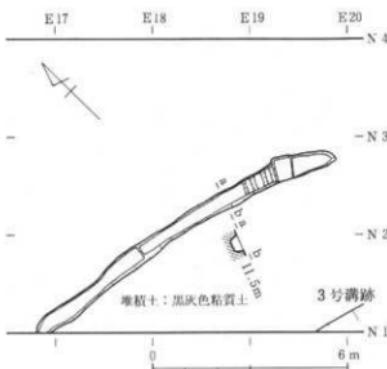


第6図 1号溝跡

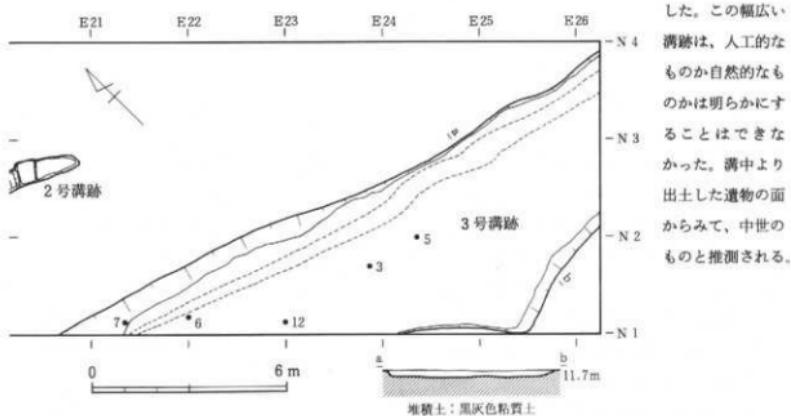
ほど下げた面より検出され、底部は2層下部まで達している。溝中の堆積土は黒灰色粘質土で、基盤層は青灰色粘土である。遺物は出土しなかった。この溝も近世の水路であろうと考えられるが、層位の面からみて1号溝よりやや古い時代のものではないかと推測される。

・3号溝跡（第8図 図版第五-2）

これは1号溝跡の下部で検出されたものである。E20・0グリット付近からE25・N5グリットの方に向かうもので、約15mの長さで検出されている。溝幅は1・2号に比べて広く3~5mを測り、その深さは中央部で45cmを測り浅い鍋底状を呈する。堆積土は暗黒灰色の粘質土で、底部から5~10cm上部の堆積土中より、板の小片5点と曲物片1点が出土



第7図 2号溝跡



第8図 3号溝跡（破線は1号溝跡、ドットは木製品の出土地点で、番号は第12図に対応する）

(3) 遺 物

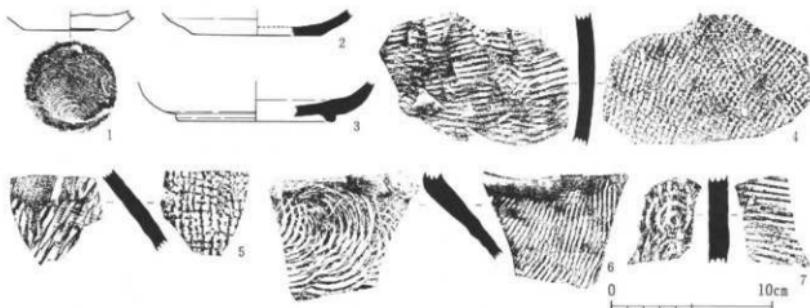
割田遺跡から出土した遺物には、土師器、須恵器、土師質土器、須恵系陶器、磁器、木製品、金属製品、土製品、植物がある。

1) 平安時代の土器

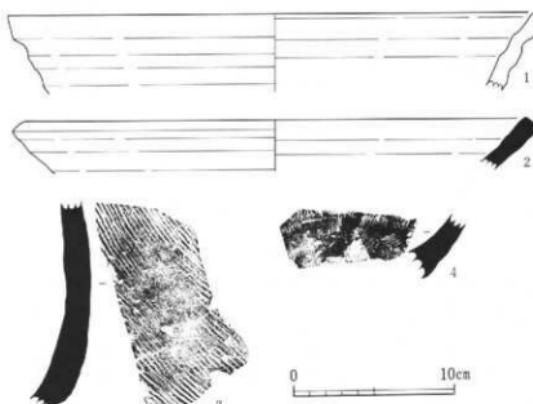
土師器と須恵器が12点出土した。

土師器（第9図-1 図版第六～1）

1は焼で、底径5.8cmを測る。底部は回転糸切りである。胎土に雲母と砂粒を含み、色調は淡赤褐色で、焼成は悪い。E 0・N 2グリット下層から出土した。



第9図 平安時代の土器



第10図 土師質土器・須恵系陶器

須恵器（第9図-2～7 図版第六～2～5）

2は碗で、内面を硯に利用した転用硯である。底部は回転ヘリ切りで、底径は8.0cmを測る。底部内面には硯磨跡が残る。胎土に白色砂粒を含み、青灰色を呈し、焼成は良好である。杭群中から出土した。3は高台付の壇である。底径は推定で9.6cmを測り、底部は高台を貼付したものナデられ、体部は水挽き整形されている。胎土に小石を若干含み、灰白色を呈し、焼成は良好である。3号溝跡覆土から出土した。

4～7は壺の胴部片である。4・5は、外面に格子文の印きが施され、内面に横位平行文のあて具痕が残る。6・7も外面に格子文の印きを施すが、内面には同心円文のあて具跡が残っている。いずれも杭群中からの出土である。

2) 陶磁器類

土師質土器2点と、須恵系陶器8点、磁器23点が出土した。

土師質土器（第10図-1 図版第六-7）

1は鉢の口縁部片で、口径は33cmを測る。口唇部の器厚が薄くなつておさまる形態で、体部は水挽き整形されている。胎土に砂粒と石英を多く含み、色調は暗黄白色で、焼成は不良である。E19・N2グリット上層から出土した。

須恵系陶器（第10図-2～4 図版第六-6・8・9）

2は鉢の口縁部片で、口径は推定で32.6cmを測る。口唇部は面をなし、体部は水挽き整形されている。胎土に砂粒と石英を含み、色調は青灰色で、焼成はやや良好である。3号溝覆土から出土した。

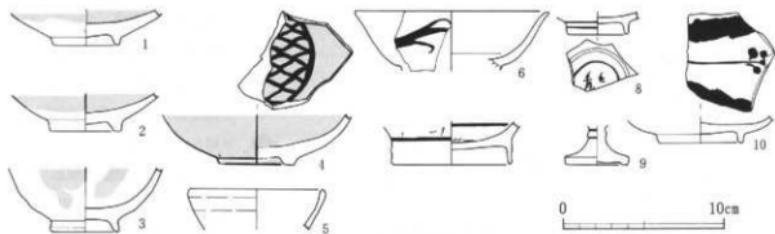
3は壺の胴部片である。外面に斜位平行文の印きが施され、内面はナデられている。胎土に若干の小石と雲母を含み、色調は暗灰白色で、焼成はやや不良である。SD1覆土から出土した。

4は擂鉢である。擂目は1単位11本で比較的密に施され、体部外面はナデられている。胎土に砂粒と石英を多く含み、灰白色を呈し、焼成は良好である。杭群中から出土した。

磁器（第11図 図版第六-11～15 七-1～3）

1は白磁の碗である。底径は4.0cmを測り、体部の内外面に釉が認められる。胎土は精選されており、釉調は青白色である。杭群中から出土した。

2は青磁の皿で、底径は4.4cmを測る。体部内外面に釉が認められ、胎土は精選されており、釉調は淡青白色である。E1・N3グリット上層から出土した。3は碗で、底径4.1cmを測り、体部の内外面に釉が施されている。胎土は精選され、釉調は暗黄褐色を呈する。杭群中から出土した。4は青磁の碗で、底径は4.6cmを測る。



第11図 磁器

体内部の見込部に薄い青色の具須によって網目文が描かれ、器面全体に釉が認められる。胎土は精選され、釉調は青白色を呈する。杭群中からの出土である。

6は染付けの碗で、口径は12cmを測る。体部外面には、緑色の具須によってアヤメ様の植物が描かれている。胎土は精選され、素地は灰白色である。杭群中から出土した。7も染付けの碗で、底径7.2cmを測る。高台は薄く直線的に立ち上がり、体部外面には藍色の具須によって直線が描かれている。胎土は精選され、素地は青白色である。杭群中から出土した。8も染付け碗で、底径は3.7cmを測る。高台部分に藍色の具須によって2本の直線が描かれている。底部には「看」などの文字が見られる。胎土は精選され、素地は白色である。杭群中から出土した。

9は蓋で、つまみ部が欠損している。口径は3.8cmを測り、藍色の具須による2本の直線がひかれている。胎土は精選され、素地は黄白色を呈する。杭群中から出土した。

10は染付けの皿で、底径は5.2cmを測る。内面に藍色の具須によって植物の葉と花が描かれている。胎土は精選され、素地は白色を呈する。杭群中からの出土である。

3) その他の遺物

木製品（第12図 図版第七一 4～13）

曲物や板材などが出土した。

1～6は曲物の部材である。1は口径15.8cmを測り、底部は欠損している。側板は薄板材を二重に巻き、端部を桜皮で縫じてある。口縫部はさらに幅2.2cm～2.5cmの薄板材を一巻きして、木釘と桜皮で止めている。2は口縫部で、固定用の桜皮が残存する。3は側板の一部である。4～6ははめ込み式の底板で、4と5は円形、5は小判形を呈する。1・2は2号河川跡8層、3・5・6は3号溝跡、4は2号河川跡4層から出土した。

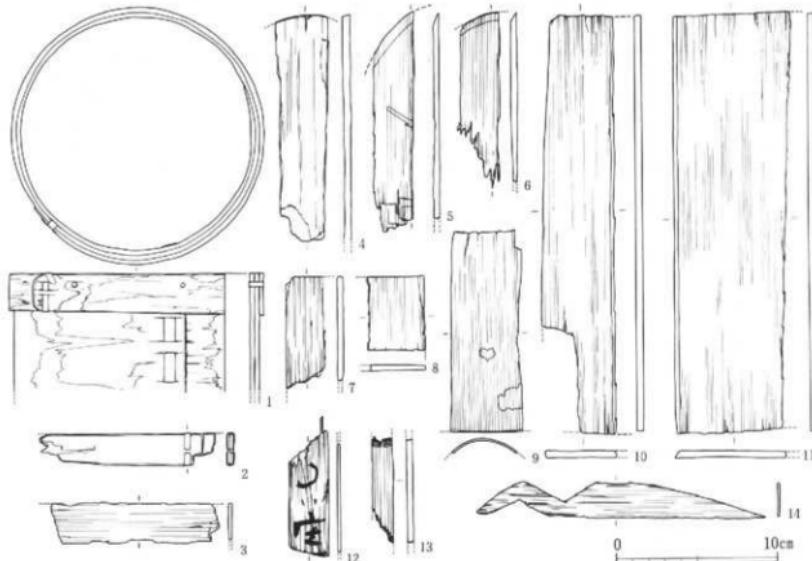
7～12は柾目の板材で、厚さは1mm～4mmを測る。9は樹皮とも思われる。12には墨書が認められるが、遺存状態が悪く、赤外線カメラによっても判読できなかった。7・12は3号溝跡、8・9は2号河川跡8層、10・11は1号河川跡、12はW18・S1グリット上層からの出土である。

13は幅の狭い棒状の板で、両端が焼けて炭化している。点け木として使用されていたものと思われる。2号河川跡の4層から出土した。

14は鳥形である。全長17.8cm、幅2.2cmで、厚さは1.5mmと薄い。1号河川跡のW18・N1グリット上層から出土した。

金属製品（第13図 図版第七一 18～22）

釘、箸、煙管椎首、鉛弾がある。いずれも杭群中からの出土である。



第12図 木製品

1・2は鉄釘で、断面は正方形を呈している。1は長さ8.8cm、重さ10gで、2は頭部を欠損し、残存長7.8cm、重さ4.8gである。

3は銅製の箸で、長さ18.3cm、重さ14gである。持ち手部分は耳搔き状になり、二股になる部分には抉りが入り装飾的となっている。断面は梢円形を呈する。4は銅製の煙管雁首である。吹き口は円形で直径6mmを測り、銅板の厚さは1mmで、重量は7gと軽い。

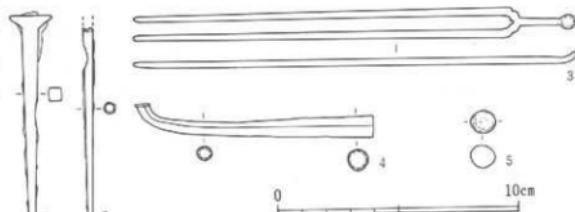
5は鉛製の弾丸である。径1cmの円球で、重さ7.5gを測る。

土製品（第14図 図版第七-23）

本鳥である。頭部を羽毛の中にいれて休んでいる様子を表しており、大きさは3.5cm×2.2cmである。底部には径5mmの凹みが認められる。胎土に砂粒と雲母を含み、色調は暗黄褐色で、焼成はあまり良くない。杭群中から出土した。

植物（第15図）

瓢箪の一部と思われる。2号河川跡の19層から出土した。



第13図 金属製品

杭 (図版第八)

杭の太さは径4.5cm～10cmのものが認められる。長さは、短いもので20cm、長いもので95cmである。杭の根本は鉈様の工具で削られており、削り方には一面だけを削るものと、二面、三面、四面、六面を削るものなどがある。削り部分の長さは、約5cm～20cmであった。これらのうち、腐食を防ぐために炭化されているものもある。



第14図 土 製 品



第15図 植 物



発 挖 風 景

IV ま と め

今回発掘調査を実施した割田地区は、島崎川右岸の沖積平野の水田地帯で、古くは河川の氾濫・洪水が繰り返された堆積土地帯である。かつて稻刈り時には、水田中に舟を浮べて稻を運んだといわれる。明治末年から大正にかけて漸く排水工事が実施され、以後何回かの耕地整理の結果、今日の状況になったものである。したがって、発掘地内においても地層の擾乱が多くみられた。

発掘地点の土質層序を概観した場合、耕作土（第Ⅰ層）、その下第Ⅱ層は旧水田盛土層、この上面から河川跡・溝跡が現れはじめた。その下の層が青色粘土層となっている。したがってこの地区一帯の地盤は全体に軟弱である。発掘地点脇の道路をはじめ整備工事のために走るトラックによって微震のような振動を感じられ、また発掘に使用した重機が発掘作業中に土中にもぐって動きが取れなくなるというような一幕もあった。このような地盤では人間の居住は極めて困難であると考えられる。

今回の発掘では、河川跡 2 本、溝跡 3 本、および河川の縦辺補強のためかとみられる杭群（しがらみ）等の遺構が検出された。それとともに、若干の古代の土器片（9～10世紀）や、中・近世の陶器磁片、鳥形土製品、鉛弾・かんざし・煙管頭首・釘といった金属製品などが出土した。3 号溝跡や河川跡の堆積土中からは、人工的な板片数点と、曲物が検出された。板片のうち 1 点には墨書きが認められたが、判読不能であったことは残念である。また、1 号河川跡では鳥形木製品も 1 点出土した。

いずれにしても、これらの遺物の多くは河川中からの出土であるため、本来の使用の状況をうかがうことは難しい。但し、鳥形木製品は水にかかる祭祀の具として、河川に流された可能性が高い。

以上のように、1 号・2 号河川跡の時代は古代から中世、さらに近世にかけて存在したものと考えられ、それも時代によってその流路を少しづつ変化させてきたものようである。また溝跡 1・2 号は近世の水路、3 号については不明な点もあるが、曲物の出土から中世のものであろうと推定するに至った。また杭群については、近世において 1 号河川跡と関連をもって設けられた施設と考えられる。

V 結び

割田遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業に伴う事前調査であった。從来、この地域は低地帯のため遺跡はほとんど発見されていなかった。ところが、本遺跡から南東約500mの地点、鷺村和島村の門新地区的水田中にいて、河川跡に沿った微高地部分から10世紀前半の掘立柱建物跡10棟などが検出された。割田遺跡でも確認調査において河川跡を検出し、門新遺跡との関係も推測されたので、慎重に発掘調査を進め、下記のような成果を得た。以下、山本仁、佐藤俊策、鈴見和夫氏等の討議を基として整理したものを記し、結びとしたい。

調査の結果、2筋の河川跡とそれに伴う杭群、3条の溝跡等を発掘した。2筋の河川はその配置から推測すると、上流となる本遺跡の南において1筋の河川が2筋に分流しているものと考えられる。遺物は、1号河川跡から土師器、須恵器、陶器、磁器、金属製品、鳥形木製品等、2号河川跡からは土師器、陶器、曲物等が出土した。これらの遺物から、2筋の河川は古代から中・近世にかけて併流していたと考えられる。但し、2号河川跡は、1号河川跡の確認面より一枚下の層位で検出されたことから、1号河川跡より廃絶は早い。2号河川跡では発掘した部分において近世の遺物が全くみられないことから、中世末か近世の初め頃には河道を失っていたのではないかと思われる。

また、1号河川跡は発掘区の北西端で急激に大きく広がっている。ほ場整備に伴う平成6年度の確認調査では、本遺跡の北西側は広大な範囲にわたって潟状の湿地帯になっていた。1号河川跡はこの潟に流入していたと考えられる。そして、1号河川跡が潟に開口する部分には杭群が設けられていた。柵（しがらみ）の機能を持つものであろう。

3条の溝跡はいずれも浅い。このうち1・2号溝跡は、2号河川跡の確認面より上層に設けられていることから、近世以降のものと言える。溝底にはわずかな砂が堆積し水の流れの痕跡が認められることから、水路としての機能が考えられる。一方、3号溝は2号河川跡の確認面と同一面で検出されていることから、中世頃のものと推測される。溝の機能を明確にはできなかったが、曲物や板材が狭い範囲に比較的多く出土していることから、生活に関連する遺構の可能性が高い。墨書きが残る板片の出土も、大変興味深い。これらの遺物を直接生み出した遺構が、3号溝跡の近辺に存在するものと思われる。

すでに「遺跡の立地と環境」の章に記されているように、出雲崎町から寺泊町に至る島崎川の流域には、古代から中世の遺跡が多い。寺院跡（寺泊町横瀧山庵寺跡）、官衙跡（和島村八幡林遺跡・寺泊町京田・諫訪田遺跡）、集落跡（寺泊町小谷地割遺跡ほか）、屋敷跡（出雲崎町寺前遺跡・同番場遺跡ほか）、須恵器窯跡（出雲崎町桜子谷窯跡、同メチガ谷窯跡ほか）、製鉄跡（出雲崎町金谷川・合清水遺跡・同谷地製鉄跡・同げんざぶろう遺跡・寺泊町中道遺跡ほか）、城館跡（出雲崎町小木ノ城跡・寺泊町夏戸城跡ほか）等、多様である。古くは潟湖や湿地が広がっていた島崎川沖積地域は、遺跡間の交通に、水運が果たした役割は大きかったものと推測される。

門新遺跡では、小河川に沿った微高地上に建物群が整然と並び、河川の蛇行部に15m×7mの範囲を約1m掘り下げてテラスが造り出されており、船着場に推定されている。これが正しいならば、島崎川以外の小河川においても、水運の盛行が考えられる。

割田遺跡で発掘した河川跡は、堆積土層の状態や河川の幅・深さ、流路の方向といった点から、門新遺跡で検出されたものと同一の河川である可能性が高い。本遺跡では水運の状況を知る直接的な痕跡はなかったが、発掘区の北西端で検出した柵（しがらみ）と考えられる杭群は、舟の運航を助ける役割を担っていた可能性も考えられる。

以上、1・2号河川跡や3号溝跡の状況、並びに出土遺物から、古代から中・近世にかけての水運とそれをめぐる人々の生活の一端を知る手掛りを、今回の発掘調査によって得ることができたと思われる。

四版



1 発掘調査前の割田遺跡（東より）



2 発掘区全景（北西より）



1 1号河川跡（北東より）



2 1号河川跡（東より）



1 杭・流木群と1号河川跡（北西より）



2 杭群（北より）



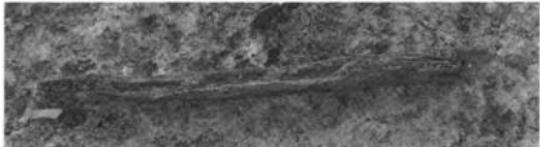
1 杭群（南より）



2 杭



3 鳥形木製品出土状態



4 流木



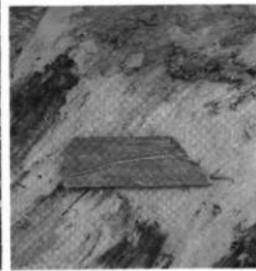
1 2号溝跡（西より）



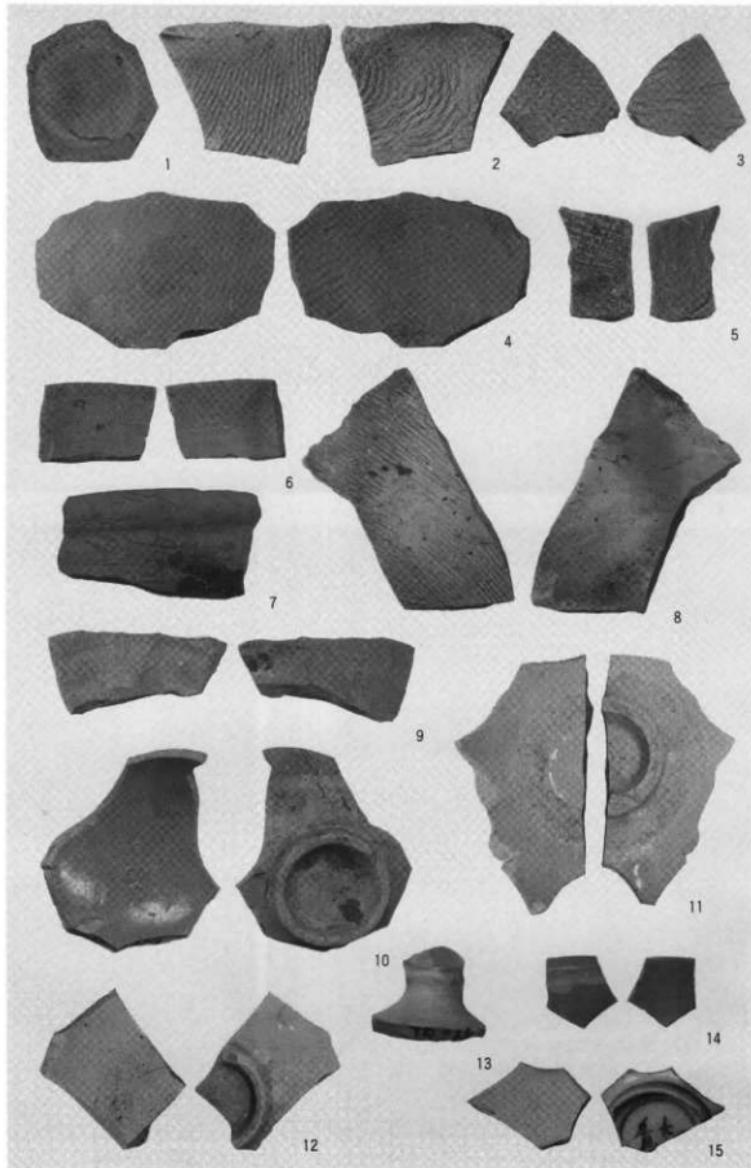
2 3号溝跡（西より）



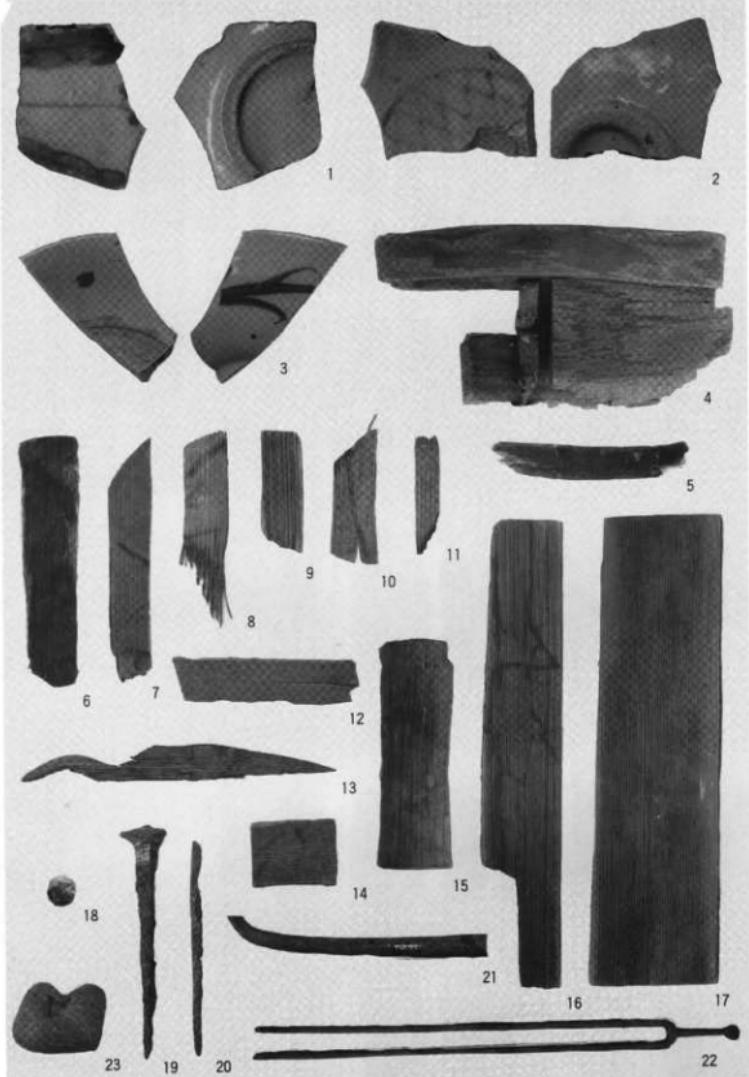
3 曲物出土状態



4 木製品出土状態

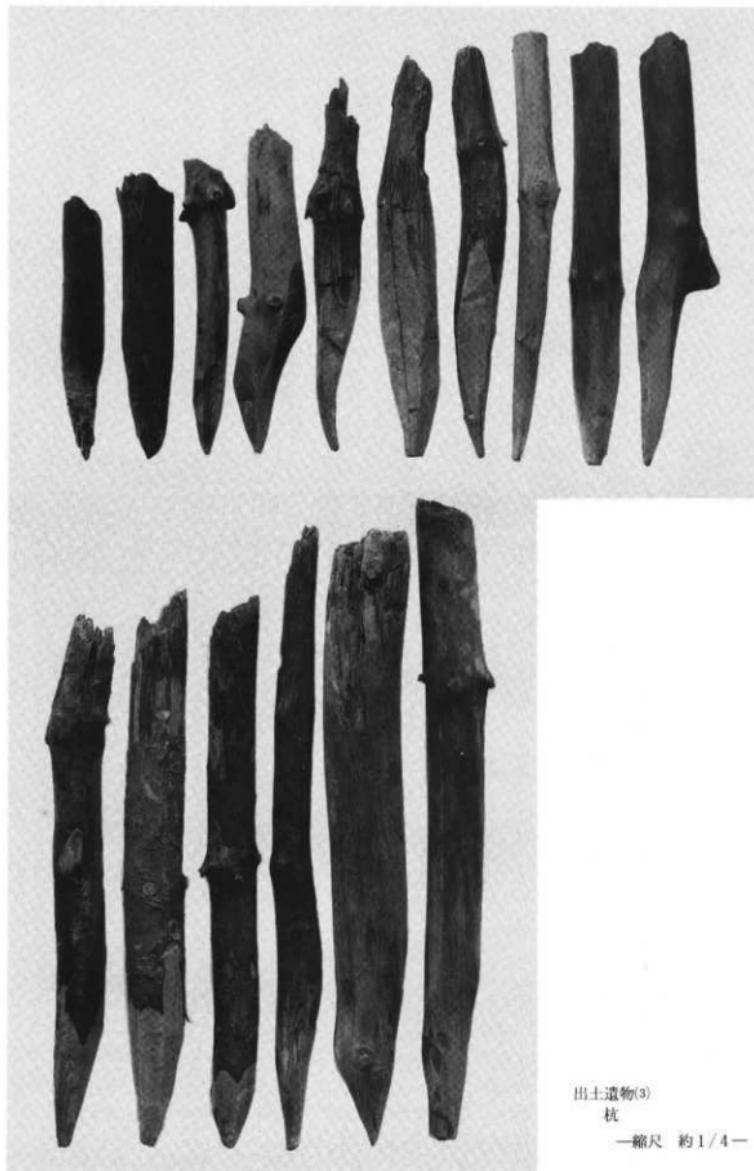


出土遺物(1) [1:土師器、2~5:須恵器、6・8・9:須恵系陶器、7:土師質土器、10~15:磁器]
—縮尺1/3—



出土遺物(2) [1~3: 磁器、4~8: 曲物、9~12・14~17: 木製品、13: 鳥形木製品、18: 鉛弾、19・20: 銅、21: 煙管歯首、22: かんざし、23: 鳥形土製品]

—縮尺: 1~17は1/3、18~23は1/2—



出土遺物(3)
杭

—縮尺 約 1/4 —

割田遺跡発掘調査報告書

平成7年3月30日

発行 寺泊町教員委員会
新潟県三島郡寺泊町
印刷 有限会社めぐみ工房
長岡市千場 電32-7427
